

【本編】

○廃墟ビル・エントランス（夜）

若い頃の佐藤文太（22）が立っている。地面にはチンピラが何人も倒れている。エントランスの中心部にある椅子に中津川哲治（20）が縄で縛られて座らされ、口をガムテープで覆われている。文太、中津川のガムテープを外す。

文太「大丈夫か」

中津川「ありがとう。……文さん！」

チンピラ、文太の背後から襲いかかる。文太、チンピラを返り討ちにする。文太、肩で息をしていて疲れている様子。ただ、画面に文太の表情は映っていない。

文太「……よし」

中津川「……文さん？」

文太「ん？」

中津川「文さん、なんで」

○佐藤家・和室（朝）

文太（61）、布団の上で目が覚める。季節は夏。月曜日。時刻は7時。部屋の棚には禁酒セラピーの本や常備薬が置かれている。文太の家は一軒家で千代子と二人暮らし。子供はいない。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、リビングに行く。妻の千代子（60）が朝食の準備をしている。千代子、文太に気づくとテレビを消す。

文太、千代子、朝食を食べる。

千代子「今日も暑いみたいですよ」

文太「そうか」

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読む。古時計の12時の鐘が鳴る。

○佐藤家・リビング

文太と千代子、そうめんを食べている。

千代子「夜はどうしましょう」

文太「魚が良いな」

文太、そうめんを食べ終わる。

文太「ごちそうさま」

千代子「はい」

文太、血圧の薬を飲む。

○佐藤家・和室

文太、ジョギングの格好に着替えて和室から出ていく。

文太、廊下を歩きながら居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「いつてくる」

居間から千代子の声が聞こえる。

千代子「はい」

○商店街

文太、「柴田洋服店」の前で立ち止まる。シャッターには「臨時休業」の貼り紙。

文太の背後には商店街の入り口。狼と牛の被り物をした二人組が去っていく様子が遠くに映る。

柴田洋服店の向かいには駄菓子屋の「すずむら駄菓子」がある。すずむら駄菓子の店主、鈴木敏明（61）が店前で椅子に座っている。ヘッドフォンをつけてゲームをしており、機械に詳しくそうな印象。

鈴木「よう文さん」

文太「おう」

鈴村の嫁、鈴村絹枝（58）が店の中から出てくる。気が強いものの、人情味ありそうな雰囲気。

絹枝「おとうちゃん、電話」

文太、ジョギングを再開。

○佐藤家・廊下

文太、ジョギングから帰ってくる。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「戻った」

千代子「はい」

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読書を再開。

○佐藤家・リビング（夜）

文太と千代子、夕食を食べる。文太の体調を考え、味付けが薄い魚料理となっている。

文太、醤油に手を伸ばす。千代子、ちらっと文太を見る。

文太、醤油に伸ばした手を引っ込める。

○佐藤家・廊下（夜）

風呂上がりの文太、パジャマに着替えて廊下を歩いている。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「おやすみ」

○佐藤家・和室（夜）

文太、布団に入って目を瞑る。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。時刻は7時。タイムループが始まっており、文太は自覚ないが全て前日と同じように世界は動く。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、リビングに行く。妻の千代子が朝食の準備をしている。千代子、文太に気づくとテレビを消す。

文太、千代子、朝食を食べる。
千代子「今日も暑いみたいですよ」
文太「そうか」

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読む。
古時計の12時の鐘が鳴る。

○佐藤家・リビング

文太と千代子、そうめんを食べている。
千代子「夜はどうしましょう」
文太「肉が良いな」

○商店街

ジョギング中の文太、洋服屋の前で立ち止まる。シャツターには「臨時休業」の貼り紙。

鈴村が文太に話しかける。

鈴村「よう文さん」

文太「おう」

店の中から絹枝が出てくる。

絹枝「おとうちゃん、電話」

○佐藤家・廊下

文太、ジョギングから帰ってくる。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「戻った」

千代子「はい」

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読む。

○佐藤家・リビング（夜）

文太と千代子、夕食を食べる。献立はハンバーグ。

文太、ソースに手を伸ばす。千代子、ちらっと文太を見る。

文太、ソースに伸ばした手を引っ込める。

○佐藤家・廊下（夜）

風呂上がりの文太、パジャマに着替えて廊下を歩いている。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「おやすみ」

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、千代子、朝食を食べる。

千代子「今日も暑いみたいですよ」

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読む。

○佐藤家・リビング

文太と、そうめんを食べている。千代子から夕食の献立を聞かれた直後。

文太「魚が良いな」

○商店街

洋服屋の前で立ち止まっている文太に鈴村が話しかける。

鈴村「よう文さん」

○佐藤家・廊下

文太、ジョギングから帰ってくる。

○佐藤家・和室

文太、本棚から小説を取り出して読む。

○佐藤家・リビング（夜）

文太と千代子、夕食を食べている。

文太、醤油に手を伸ばす。千代子、ちらっと文太を見る。

文太、醤油に伸ばした手を引っ込める。

○佐藤家・廊下（夜）

風呂上がりの文太、パジャマに着替えて廊下を歩いている。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「おやすみ」

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、千代子、朝食を食べる。

○佐藤家・リビング

文太と千代子、昼食のそうめんを食べ終える。

文太「ごちそうさま」

千代子「はい」

○商店街

洋服屋の前で立ち止まっている文太に鈴村が話しかける。

鈴村「よう文さん」

○佐藤家・廊下

文太、ジョギングから帰ってくる。

○佐藤家・リビング（夜）

千代子、夕食の準備をしている。

文太、日本酒の瓶をテーブルの上に置く。文太は毎週日曜と木曜だけ晩酌をすることにしている。千代子、それに気づく。

千代子「今日も飲むんですか？」

文太「……今日は木曜だ」

千代子「月曜ですけど」

千代子、文太にスマホを見せる。日付が7月28日（月）となっている。文太、事態を飲み込めていない。

千代子「忘れたんですか。昨日飲んだの」

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。時刻は7時。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、リビングに行く。妻の千代子が朝食の準備をしている。千代子、文太に気づくとテレビを消そうとする。

文太「あ、母さん」

千代子、テレビを消すのを止める。

テレビの声「さあ月曜日です。今週も頑張つていきましょう」

文太「月曜」

○商店街

ジョギング中の文太、洋服屋の前で立ち止まっている。シャツターには「臨時休業」の貼り紙。

鈴村が文太に話しかける。

鈴村「よう文さん」

文太「柴田さんのとこ、いつから休みだ？」

鈴村「え？ いや今日だけだろ」

絹枝が店の中から出てくる。

絹枝「おとうちちゃん、電話」

鈴村、絹枝からスマホを受け取る。

文太、臨時休業の張り紙を見続けている。

鈴村、スマホで電話している。

鈴村「いやあ無理だと思っぞ？ 文さん」

文太「ん？」

鈴村「中やんが今日飲もうだってよ」

○居酒屋六犬伝・店内（夜）

文太、居酒屋にやってくる。

4人掛けの席に石井裕司（60）、中津川（59）、鈴村が座っている。石

井はポロシャツ。

中津川「おー、文さん！」

石井「良いのかよ。今日、月曜だぜ？」

鈴村「飲むのは日、木だけなんだろう？」
中津川「ほら座れよ」
店員「ビールを4つ運んでくる。
中津川「頼んどいた」
鈴村「ほんじやまあ、お疲れー」
4人、乾杯。文太は口をつけず、店員
に新たに注文。
文太「すいません、烏龍茶ひとつ」
中津川「おいおい文さん」
鈴村「やー、ほんと変わったよなあ」
石井「な」
文太「で、なんだよ、大事な話って」
鈴村「そうだよ！ わざわざ俺たちを集めて」
石井「ああ。俺はもう今日1日、それが気になつてしようがなかった」
中津川「あ、そう？ ふふふ、実はー」
店員が通りかかる。
鈴村「あ、鶏の唐揚げ一つ」
石井「あと、串の盛り合わせも」
鈴村「タレが良いな」
石井「タレ2？」
鈴村「いや3で」
石井「タレ3、塩2で」
鈴村「あと、おしんことタコの塩辛と」
石井「おい釜飯どうする？」
鈴村「釜飯かあ」
文太「おい。…おい。中やんがほら」
中津川「不貞腐れている。」
鈴村「中やん、冗談だよ」
石井「(店員に)とりあえず以上で」
鈴村「ほら、報告があるんだろ」
中津川「もう良いよー」
鈴村「拗ねるなよ」
文太「中やん、言えよ。良い話なんだろう？」
中津川「…えー実は」
店員、烏龍茶を持ってくる。
店員「烏龍茶です」
中津川「もうー！」
鈴村「今のは文さんが悪いなあー」

文太「いやこれは俺のせいじゃないだろ。ほら、中やん」
中津川「えー、この度、私、中津川哲治は：
：再婚することに相成りました！」
鈴村「おいおいほんとかよー」
石井「思い切ったなあ、中やん！」
中津川「まあなんて言うんだろうな。前のおつかあに出ていかれて早5年。激しさは無くても、冬の海のような穏やかな幸せを手に入れたいなと思うようになりまして」
石井「かあー」
鈴村「文さん、こりやめでたいなあ！」
文太「おお」
石井「相手は幾つだ」
中津川「まあちよい下だな」
鈴村「ちよいって？」
中津川「31」
石井「31!？」
鈴村「31って、お前今年60だろ」
中津川「違うよ、59」
文太「28個下か」
鈴村「ちよい下どころの騒ぎじゃねえぞ」
石井「どこが冬の海のような穏やかな幸せだ」
鈴村「女つてのは30代が一番エロいからな」
中津川「愛美ちゃんはそのんな子じゃないから」
石井「愛美って言うのか」
鈴村「もうエロい」
文太「しかし、驚いたな」
中津川「へへへ」
鈴村「よっし、乾杯だ」
文太、烏龍茶を掲げる。
中津川「文さん」
鈴村「今日はもう良いんじゃないやねえの？」
石井「そうそう、中やんのためにもよ」
文太「…：：：そうだなあ！」
文太、烏龍茶を置いてビールジョッキを持つ。
鈴村「中やん、おめでとう！」

○居酒屋六犬伝・外(夜)

時刻は23時過ぎ。文太、居酒屋の外で泥酔している。鈴村と石井がそばにいて、中津川は既にいない。

鈴村「おいおい大丈夫かよ」

文太「しまったあ、飲みすぎたあ」

石井「これは明日に響くぞ」

鈴村と石井、文太に肩を貸して歩こうとするが、文太、その場に寝っ転がる。

鈴村「あーあー」

文太、そのまま意識を失う。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。時刻は7時。

文太、自分が二日酔いになっていないことに気づく。

文太「なんともない……」

○佐藤家・リビング（朝）

文太、リビングでテレビを見ている。そんな文太を千代子が不思議そうにしている。

テレビの声「さあ月曜日です。今週も頑張ってくださいましょう」

○商店街

文太、洋服屋の前で立ち止まっている。

シャッターには「臨時休業」の貼り紙。

鈴村が文太に話しかける。

鈴村「よう文さん」

文太「柴田さんのとこ、昨日は店開けてたか？」

鈴村「え？ あー、やってたと思うけどなあ」

絹枝が店の中から出てくる。

絹枝「おとうちゃん、電話」

鈴村、スマホを受け取る。

文太、臨時休業の張り紙を見続けたら、

鈴村、スマホで電話している。

鈴村「いやあ無理だと思うぞ？ 文さん」

文太「中やん？」

鈴村「おお、そうなんだよ！　なんか飲みた
いんだと」

○居酒屋六犬伝・店内(夜)

居酒屋に文太、中津川、石井、鈴村の
4人がいる。

中津川「えー。この度、私、中津川哲治は：
：再婚することに相成りました！」

鈴村「おいおいほんとかよー」

石井「思い切ったなあ、中やん！」

中津川「まあなんて言うんだろうな。前のお
つかあに出ていかれて早5年。激しさは無
くても、冬の海のような穏やかな幸せを手
に入れたいなと思うようになりまして」

石井「かあー」

鈴村「文さん、こりやめでたいなあ！」

文太「繰り返ししてる」

中津川「え？」

文太「同じことを繰り返ししてる」

中津川「文さん。いくら俺がバツ2だからつ
て、繰り返ししてるって言い方はないだろ」

文太「あ、そうじゃなくて」

石井「いや。俺は文さんの言いたいことも分
かるぞ」

文太「ん？」

石井「中やん、お前は少し軽率なところがあ
る。このままじゃ同じことを繰り返しするだけ
だと、文さんはそう言いてえんだよ」

鈴村「おい中やん、その辺どうなんだ！」

文太「違う違う。そうじゃない。そうじゃな
いんだよ。俺、知ってたんだよ、このやり取
り。中やんが再婚の報告をするっていう話、
昨日聞いた気がするんだ」

石井「どういうことだよ」

文太「だから、昨日確かに経験したはずなの
に、同じことが起きているんだよ。昨日を
繰り返し返してるんだ」

鈴村「：：タイムループか」

石井「タイムループ」

中津川「なにそれ？」

鈴村「今、文さんが言ったやつだよ。1日が終わってもまたその日の朝に戻る。それをタイムループっていうんだ」

文太「それだよ。俺は今、タイムループしてるんだ」

中津川「へー、なんだか分かんねえけど、すげえな文さん」

石井「それは最近流行ってるのか？」

鈴村「いや流行ってるとかじゃなくてだな、まあ要するに、文さんの気のせいだ」

文太「え？」

石井「なんだ気のせいだよ」

文太「いや気のせいじゃねえんだよ。確かに俺は一日を繰り返してんだよ。体調だってな、昨日しこたま飲んだはずなのに朝起きたら全く二日酔いになってない。どうだ？」

石井「どうだって、良いことじゃねえか」

文太「え？」

石井「どれだけ飲んでも次の日に響かないんだろ？ 最高だ」

鈴村「確かにな。こつてりしたもんも食べ放題だ」

店員、串の盛り合わせを持ってくる。

店員「お待たせしました、串の盛り合わせです」

文太、串の盛り合わせを見ている。

文太「そう、か」

文太、串に刺さった肉にかぶりつく。

文太「ははは、そうか！」

文太、ビールを一気に飲み干す。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目が覚める。時刻は7時。

文太、自分の体調がすこぶる快調であることに気づく。

文太「はははははは！」

○佐藤家・リビング（朝）

千代子、朝食の用意が終わる。文太が

起きてこないことを不思議に思い、和室の扉を開ける。

千代子「お父さん。そろそろ」

文太、いない。

○公園

文太、公園の健康器具に座りコンビニで買ったビール缶を飲んでいる。

酒の配達途中の石井が車で通りかかる。公園の中に文太がいるのを見つける。

石井「文さん？」

○ラーメン屋

文太、ラーメン屋のカウンター席でスープを飲み干す。

文太「うめえ！」

隣に石井の息子、石井弘治（21）がいる。高身長で筋肉質で色黒。髪は短めの黒髪。二人のテーブルにはビール瓶がある。

弘治「大丈夫なんですか」

文太「おう」

文太、ビール瓶のビールを弘治のコップに注ぐ。ちやうどビール瓶の中がなくなる。

文太「大将、俺とこいつに一本ずつ」

弘治「ごちそうさまです！」

○居酒屋六犬伝・店内(夜)

文太、居酒屋に入ってくる。

文太「飲むぞー！」

中津川「文さん！」

鈴村「おいおい、なんで来てんだよ」

石井「なんだお前、呼ばなかったのか」

鈴村「どうせ来ねえと思ったから」

文太「中やん、再婚おめでとう！」

石井「再婚！？」

中津川「ちよつと、なんで知ってんの？」

文太「すいません。生ひとつ！」

鈴村「おいおい文さん飲むのか？」

石井「あ、やっぱ公園いたの文さんだよな？
真昼間から缶ビール片手に」
鈴村「なんだよ、昼から飲んでたのか！」
中津川「あの。文さんの話も良いんだけど」
石井「そうだ。中やんの話だ」
鈴村「お前、再婚するってどういうことなんだよ」
中津川「まあなんて言うんだろうな。前のおつかあに出ているかかれて早5年。激しさは無くて」
文太「タバコを吸い始める。」
石井「おいおい文さん！」
鈴村「タバコで」
文太「ぷはー」
中津川「あー。俺の話」
石井「ああそうだな」
鈴村「そうだった」
石井「……いや、中やんの話も気になるが文さんのこの変わりようも見過ぎせないぞ！」
鈴村「ああ、これはこれで気になる！」
石井「むしろこっちの方が気になる！」
中津川「おいおいおい。俺、再婚するんだよ？」
石井「ゆうてバツ2だからな」
鈴村「そこまで目新しさはない」
文太「それでもねえぞ。なにせ相手は31だ」
石井「はあ？」
鈴村「31!？」
石井「それは話が変わってくるぞ」
中津川「本当なんで知ってたんだよ」
石井「本当に31なのか？」
中津川「ふふふ」
文太「名前は愛美ちゃん」
石井「愛美ちゃん！」
鈴村「もうエロい」
文太「金髪で童顔。全然20代でも通用する」
石井「へー」
鈴村「文さん、写真はないのか？」
中津川「俺に聞いてよ！写真あるから」
店員「生中、お待たせしました」

文太「中やんおめでとう！」

石井・中津川「おめでとう！」

中津川「あ、ありがとう！」

4人、乾杯。文太、一気飲み。

文太「うめえ！」

石井「豪気だねえ！」

中津川「スマホの待ち受けを見せる。

中津川「ほら！これが愛美ちゃん」

文太「すいませーん。八海山を2合」

鈴村「もう日本酒いくのか！」

石井「これは全盛期の文さん復活だ！」

中津川「聞けよ！」

× × ×

2時間後。文太、泥酔している。

文太「俺はよ。この辺りじゃ負け知らずだっ

たんだ」

鈴村「知ってる知ってる」

文太「でもよお。最近じゃ、人生がつまんね

えんだよ。毎日がただの繰り返しで刺激が

ねえんだ」

鈴村「聞いた聞いた」

文太「けどな。今は違う。なぜなら繰り返し

ているから」

石井「確かにさっきから同じ話を繰り返して

る」

文太「ちげえよ。7月28日を繰り返してん

の。タイムループだよ！」

石井「そっかあ。文さん、タイムループして

んのかあ」

文太「おうよ。でもよ、なんで俺はタイムル

ープしてんだ？」

鈴村「それはアレだろ。やるべきことがある

んだよ」

文太「やるべきこと？」

鈴村「そう！ なにかやるべきことがあるか

ら時間を繰り返し。タイムループするのは

そういうもんだ」

テーブル上の中津川のスマホのアラ

ームが鳴っている

文太「うるせえなあ！」

中津川、トイレから戻ってきてアラームを停止させる。

中津川「あー、もうこんな時間だ」

文太「俺は、スマホってやつが大っ嫌いなんだ」

石井「知ってる知ってる」

中津川「じゃあ俺はこの辺で」

石井「おいおいもういくのかよ」

鈴村「愛美ちゃんの話、まだ全然聞いてないぞ」

中津川「お前らが聞こうとしなかったんだろー。また話してやるよ」

文太「どこいくんだよ、中やん」

中津川「ふふふ、今から愛美ちゃんと会うのじゃ」

中津川、店を立ち去る。

石井「いやあ浮かれてるな」

文太「……付けるか」

石井「え？」

文太「愛美ちゃんの顔、ひと目見てやろう。

それくらいしたって良いだろ」

石井「いやいや文さん」

鈴村「それは野暮っでもんだぜ」

石井「ああ、野暮っでもんだ」

鈴村「野暮っでもんだが」

○花屋(夜)

石井、鈴村、花屋を物陰から見ている。

文太、公衆トイレから用を足して戻ってくる。

文太「なんだ、まだ出てこないのか」

石井「もう30分くらい経つよな」

鈴村「あ、来た来た」

中津川、花屋から薔薇の花束を持って出てくる。

文太たち、その後を追う。

○ミラクル・店前(夜)

文太たち、雑居ビルの5階にあるクラブ「ミラクル」の店前にいる。

石井「おいおいお得意さんだよ、ここ」

文太、中に入っていく。

従業員の西条、文太たちを出迎える。

西条「いらっしやいませ」

文太「3人で」

西条「ご案内します」

文太、席へ案内されている途中に中津川を発見。文太たちから離れた席に座っている。中津川の元へ吉田愛美（31）がやってくる。

中津川「愛美ちゃん」

石井「おいおい中やんの相手ってホステスかよ」

西条「ごゆっくりお楽しみください」

西条、立ち去っていく。

ホステスの高子（29）、文太たちの席にやってくる。ふくよかな体型。

高子「高子です。よろしくお願ひしまーす」

高子、文太と石井の間にむりやり座ろうとして文太たちの視界を遮る。

石井「ちよ！」

高子「よいしょー。なに飲みますー？ 高子、

シャンパン飲みたいーい」

中津川「結婚できないってどういうことだよ！」

鈴村「なんて？」

高子「だから、高子、シャンパン飲みたいーい」

石井「ごめん。ちよっと静かにして」

中津川「愛美ちゃん言ってたじゃん。借金返

したら俺と結婚できるって！ だから俺、なんとか金集めてきたんだよ！」

愛美、中津川の席から立ち去る。

中津川「ちよ、愛美ちゃん！」

中津川、愛美の後を追いかける。店の店長、兵藤勝（32）、中津川の前に立ち塞がる。

兵藤「お客様。お引き取りください」

中津川「愛美ちゃんと話をさせてくれ」

兵藤「申し訳ありません」

中津川「愛美ちゃん！」

中津川、兵藤を押しつけて愛美の元へ
向かおうとする。

兵藤、中津川を突き飛ばす。

鈴村「中やん！」

文太たち、中津川の元へ駆け寄る。

中津川「みんな！　なんで？」

文太、兵藤の前に立つ。

兵藤「お引き取りください」

文太「おい。会わせてやるくらい良いだろ」

兵藤「申し訳ありません」

文太「……」

鈴村「まずい、目が据わってる」

文太「どけ」

兵藤「お引き取りください」

文太「どけって」

兵藤「お引き取りください」

文太、兵藤に殴りかかる。

兵藤、その拳を易々と受け止める。

文太「あれ」

兵藤、文太を殴り返す。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目覚める。

文太「いた……くない」

○居酒屋六犬伝・店内（夜）

中津川が再婚の報告をしている。

中津川「まあなんて言うんだろうな。前のお

つかあに出ているかかれて早5年。激しさは無

くても、冬の海のような穏やかな幸せを無

に入れたいと思うようになりまして」

石井「かあー」

鈴村「文さん、こりやめでたいなあ！」

文太「中やん。お前その、相手は大丈夫なの

か？」

中津川「な、なんだよ急に」

文太「相手、ホステスなんだろ？」

石井「え！」

鈴村「おいおい中やん、そうなのかよ」

石井「お前、ホステスと婚約しようとしてん

のか！」

中津川「なんだよ、ホステスの何がダメなんだよ」

石井「別にホステスがダメってわけじゃないんだが」

文太「借金の肩代わりとかしてないよな？」

中津川「ま、まさかあ！ そんなことしないよ」

石井「おお良かった」

鈴村「ああ、最悪の事態にはなってない」

中津川「最悪の事態なのか？」

石井「……これ、肩代わりしてんなあ！」

中津川「してない！」

鈴村「してるぞ！ このリアクションは間違
いなくしてる！」

中津川「してないって！」

文太「中やん。いくらだ」

中津川「あ、そろそろ行かないと」

文太「まだスマホのアラームが鳴ってない」

中津川「なんで知ってんだよ」

文太「中やん、いくらだ？」

中津川「……500万」

石井「ご……」

鈴村「払ったのか？」

中津川「……払ったよ！ 今日の16時30
分、現金で払ってやったよ！」

○居酒屋六犬伝・店の外(夜)

中津川、ミラクルへ向かおうとする。

それを文太たちが引き留めている。

文太「待ってって、中やん」

中津川「愛美ちゃんを待たせてるんだよ」

文太「お前は騙されてるんだよ」

中津川「そんなことない！」

文太「冷静になれって。どう考えてもおかし
いだろ。若い女が、俺たちみたいなジジイ
と結婚するなんて」

中津川「……」

文太「一人で寂しいのか？ 俺たちがいるだ
ろ。……な？」

中津川「いないじゃん」

文太「え？」

中津川「いないじゃん！俺から飲み行こうって誘っても、文さん全然会ってくれないじゃん！」

文太「酒はやめたんだ」

中津川「酒だけじゃないよ！ハイキング行ことか、キャンプしようとか言っても、忙しいとか、もう若くないとか言っつて！鈴村と石井だつてそうだよ。家族の用事があるとか、町内会のイベントがどうか、そんなんでも、そんなんでもよく俺たちがいるとか言えるよなあ！」

中津川、立ち去っていく。

文太「……」

鈴村「まあでも、騙されたって決まったわけじゃないからなあ」

石井「ああ」

鈴村「それに万が一、騙されたとしてもそれが中やんにとつて幸せっていうパターンもあるわけだし」

文太「ないだろ！」

鈴村「無いか」

石井「でもよ、もう金を払っちゃまったんだろ」

鈴村「しかも相手はホステスってことは多分、ややこしいぞ」

石井「せめて払う前に止められてたらなあ」

文太「……俺がすべきことって」

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目を覚ます。

○家電量販店・店内

文太、スマホを購入した直後。店員がスマホを持ってくるのを、受け取りカウンター前の椅子に座って待っている。

鈴村「ついに文さんもかあ」

鈴村、文太の隣に座っている。

店員、文太が購入したスマホを持ってくる。

店員「お待たせしました。こちらでお間違えないでしょうか」

文太「はい」

店員「では、ご用意いたします。あ、よろしければこちらのアンケートにご記入してお待ちください」

店員、机の上にアンケート用紙を置く。

店員「ご購入ありがとうございます」

文太、鈴木、店から出ていく。テーブルの上に文太が書いたアンケート。『スマホを持つのは何台目ですか?』の項目の『初めて』がチェックされている。

○ミラクル・店の前

14時30分。文太、エレベーターでミラクルが入っている雑居ビルの5階までやってくる。

扉には「close」の札が掛けられている。扉が開き、中からミラクル従業員の北山と東野が出てくる。北山は肩にかかるくらいの長さの緑色の髪。

二人は、ホステスの高子に豚井を買いに行けと言われた直後。北山と東野は不満げ。

北山「何が豚井だ」

東野「共食いですよ、共食い」

二人、文太が立っていることに気づく。

北山「なに? まだオープン前なんだけど」

○ミラクル・ビル前

文太、エレベーターで1階まで降りた後。

文太、ミラクルのビルの裏手に非常階段があるのを見つける。

○ミラクル・非常階段

文太、5階まで非常階段を登る。息を切らしながらなんとか登り切る。文太、ミラクルの裏口から入ろうとする。が、

裏口の鍵は閉まっている。

文太「くそ」

文太、ミラクルのビルの前に石井酒店の車が停まっていることに気づく。配達でミラクルにやってきた石井が、車から出てくる。

文太「石井！」

文太、急いで非常階段をくだろうとする。

文太「うっ！」

文太、急に動いたせいで腰を痛める。

○ミラクル・ビル前

石井、配達を終え、車に乗って去っていく。

その直後、文太が手すりにもたれながらなんとか1階まで降りてくる。

○カフェ・店内

文太、ミラクルの向かいにあるカフェでミラクルを見ている。

ミラクルのあるビルの裏口からスタツフの西条が出てきて、1階へと降りていく。

文太、腕時計を見る。15時31分。

○ミラクル・ビル前

西条、1階まで降りてきてタバコを吸いながらどこかへいく。

文太、西条をやり過ぎし、再び非常階段を登る。

○ミラクル・非常階段

文太、足を引きずり、腰に手を当てながら再び非常階段で5階へ。

文太「はあはあはあ」

文太、裏口の扉を開き、中の様子を伺う。

○ミラクル・店内

狭い廊下が伸び、廊下に面してホステスの待機室がある。廊下の先がラウンジになっている。イヤリングをつけている途中の高子が待機室から出てきて、ラウンジへと向かう。文太、その後を追いながら中へ入っていく。

高子「ねえ愛美。私の化粧水、知らない？」
愛美「知らないよ」

ラウンジには愛美と兵藤が座っている。愛美、兵藤の腕に自分の腕を絡ませ、スマホ画面を見せている。

愛美「じゃあシンガポールは？　ここ、超綺麗じゃない？」

高子「あー、どっかにいい男いねえかな」

高子、ラウンジの席に座る。

文太、スマホを取り出し、陰から兵藤と愛美の様子を撮影しようとするのだが、操作方法が分からない。

文太「えっと」

文太、ポケットに入れた説明書を取り出して読む。だが老眼のため細かい文字が読めない。

兵藤「そうだ、電話しねえと。なんで俺の機種だけ、電波入らねえんだよ」

兵藤、立ち上がり、正面口へ。

愛美「あんたも準備しなさいよ」

愛美、立ち上がって待機室へ向かう。廊下にいる文太を見つける。

愛美「誰！？」

文太「あ」

文太、非常口から逃げようとする。気づくと西条が立ちはだかっている。

○佐藤家・和室（朝）

文太、頬を抑えながら布団から起き上がる。

文太「くそっ！」

○家電量販店・店内

文太、一人でスマホを購入して店を出た後。

店員「お買い上げありがとうございます」

文太、鈴木、店から出ていく。テーブルの上に文太が書いたアンケート。『スマホを持つのは何台目ですか？』の項目の『2台目』にチェックがされている。

○カフェ・店内

ミラクルの近くにあるカフェ。文太、「初めてのスマホ」という本を読んでいる。

スマホのアラームが鳴る。

文太「えっと」

文太、「停止」をタップする。時刻は15時20分。

○ミラクル・非常階段

文太、5階まで非常階段を登る。前回よりも辛そうじゃない。

文太、上着を捲り、腰に貼った湿布の粘着力が弱まっていないか確認。

文太、腕時計を確認。15時31分。

ミラクルの裏口から西条が出てきて1階へ向かう。

文太、5階と6階の間の階段で西条をやり過ぎし、裏口へと入る。

○ミラクル・店内

文太、廊下を歩いてラウンジ手前まで行く。

兵藤、愛美、VIPルームから出てきて席に座る。

兵藤「とにかく今の話は誰にもすんじゃねえぞ」

愛美「当たり前でしょ」

兵藤、愛美、ラウンジのソファに座る。

兵藤「おい。VIPルームの掃除は？」

北山「あ、今から」

北山、東野、VIP ルームに入る。

愛美「ねえねえ」

愛美、兵藤の腕に自分の腕を絡ませる。

愛美「例の金が入ったら海外でも行かない？ ハワイとか」

愛美、スマホ画面を兵藤に見せる。

文太、スマホを取り出して2人の様子を撮影。カメラのシャッター音が鳴ってしまふ。

兵藤「誰だ」

文太、裏口へと向かう。待機室から、イヤリングをつけながら高子が出てきて立ち塞がる。

高子「ねえ愛美。私の、誰！？」

○佐藤家・和室（朝）

文太、再び顔を押さえながら起き上がる。

文太「くそっ！」

○家電量販店・店内

文太、家電量販店のアンケート用紙を記入している。『3台目』にチェック。

○カフェ・店内

文太、ミラクルの向かいにあるカフェにいる。文太、「おすすぬアプリ」という本を読んでいる。

○ミラクル・店内

文太、廊下を通過してラウンジ手前まで行く。

兵藤、愛美、VIP ルームから出てきて席に座る。

兵藤「とにかく今の話は誰にもすんじやねえぞ」

愛美「当たり前でしょ」

兵藤、愛美、ラウンジのソファに座る。

兵藤「おい。VIP ルームの掃除は？」

北山「あ、今から」

北山、東野、VIP ルームに入る。

愛美「ねえねえ」

愛美、兵藤の腕に自分の腕を絡ませる。

愛美「例の金が入ったら海外でも行かない？ ハワイとか」

愛美、スマホ画面を兵藤に見せる。兵藤はあまり乗り気じゃない。

兵藤「ハワイ？」

スマホから無音カメラアプリを選択して写真を撮る。

文太、裏口の方を見ると、イヤリングをつけている途中の高子が待機室を開けている。

文太、ラウンジのテーブルの下に隠れる。

高子、ラウンジまでやってくる。

高子「ねえ愛美。私の化粧水、知らない？」

愛美「じゃああシンガポールは？ ここ、超綺麗じゃない？」

高子「あー、どっかにいい男いねえかな」

高子、ラウンジの席に座る。

兵藤「そうだ、電話しねえと。なんで俺の機種だけ、電波入らねえんだよ」

兵藤、立ち上がり、正面口へ。

愛美「あんたも準備しなさいよ」

愛美、立ち上がって待機室に戻ろうとする。

西条が裏口からやってくる。

愛美「タバコ行ったんじゃないの？」

西条「ライター忘れちゃって」

西条、ラウンジにやってくる。

高子「ねえねえ西条くん」

西条「はい」

高子「私、最近マッチングアプリ始めたのよ」

西条「はい」

高子、大袈裟にため息。

西条「……どうしたんですか？」

高子「いや良い男が全然いなくてさー。別に高望みしてるわけじゃないのよ？ 身長は

180くらいで、筋肉質で、ちよつと色黒で、髪は短めの黒髪で、俊つて名前ならOKってだけなのに」

西条「名前まで決まってるとなると難しそうですね」

高子「そうなのよ。私もその制約に苦しめられているのよ。だからね、最悪俊介でも俊太でも、あつ」

高子、イヤリングを落とす。

高子、しゃがむと文太と目が合う。

高子「きゃー！」

○佐藤家・和室（朝）

文太、再び顔を押さえながら起き上がる。

○家電量販店・店内

文太、一人でスマホを購入して店を出た後。

店員「お買い上げありがとうございます」

文太、鈴村、店から出ていく。テーブルの上に文太が書いたアンケート。『スマホを持つのは何台目ですか？』の項目の『5台目以上』のチェックボックスの後の（ ）の中に『12台目』と記入。

○カフェ

ミラクルの向かいにあるカフェ。

文太、「周辺機器」の本を読んでいる。テーブルの上には滑り止めのついた軍手が置かれている。

スマホのアラームが鳴る。文太、慣れた手つきで止める。

○ミラクル・店内

文太、廊下を通過してラウンジ手前まで行く。

兵藤、愛美、VIPルームから出てきて席に座る。

兵藤「とにかく今の話は誰にもすんじゃねえ

ぞ」

愛美「当たり前でしょ」

兵藤「愛美、ラウンジのソファに座る。

兵藤「おい。VIPルームの掃除は？」

北山「あ、今から」

北山、東野、VIPルームに入る。

愛美「ねえねえ」

愛美、兵藤の腕に自分の腕を絡ませる。

愛美「例の金が入ったら海外でも行かない？ ハワイとか」

愛美、スマホ画面を兵藤に見せる。兵藤はあまり乗り気じゃない。

兵藤「ハワイ？」

スマホから無音カメラアプリを選択して写真を撮り、ラウンジのテーブルの下に隠れる。

文太、ミニスピーカーを、ラウンジの正面入り口近くに向けて地面を滑らせるようにして投げる。

イヤリングをつけながら、高子がラウンジまでやってくる。

高子「ねえ愛美。私の化粧水、知らない？」

愛美「知らないよ」

文太、スマホを操作してミニスピーカーを再生する。

ミニスピーカーから音楽が流れる。

兵藤、高子、愛美、音の出所に気を取られる。その隙に文太、テーブルの下から出て走って裏口に向かおうとする。兵藤、鏡越しに文太が移動したのが見える。

兵藤「誰だ」

兵藤、文太を追いかける。

文太、走って裏口から外に出る。裏口の扉は閉める。

兵藤、裏口の扉を開ける。

目の前には非常階段を登ってきた西条がいる。

西条「あ、ライター忘れて」

兵藤「誰かいなかったか」

西条「いえ」

兵藤「……」

兵藤「6階へと続く階段を見る。」

兵藤「ついてこい」

兵藤と西条、非常階段を登っていく。

文太、非常階段の外側にぶら下がっている。両手は滑り止め付きの軍手をはめている。

○ミラクル・ビル前

中津川、ミラクルの正面入り口前にやってくる。紙袋を持って中に50万円入っている。

帽子を深く被った文太、中津川に話しかける。

文太「中やん」

中津川「文さん？」

○公園(夕方)

文太と中津川、公園のベンチに座っている。中津川、文太のスマホを見ている。愛美が兵藤に腕を絡めている写真。

文太「中やん。この女はお前を騙してる」

中津川「……兄妹だろ」

文太「そんなわけないだろ。この二人は確実にできてる」

中津川「この写真だけじゃそうとは言い切れない！」

文太「中やん」

中津川「仲の良い兄妹なんだよ。すっごい仲が良いんだよ！ ああ、俺もう行かないと！」

中津川、立ち去っていく。

文太「この写真だけじゃ、か」

(フラッシュバック) × × ×

兵藤、愛美、VIPルームから出てくる。

兵藤「とにかく今の話は誰にもすんじやねえぞ」

× × ×

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団で目を覚ます。

○柴田洋服店・店内

文太、前回のループまで臨時休業となつていたはずの柴田洋服店でポロシャツを選んでいる。他に客はいない。文太、そのことに気づいていない。また店の外観は描写されず、視聴者にもこの事実が現時点で伝わらないようになっている。
レジには柴田徹（72）が座りながら眠っている。

○石井酒店・店先

文太、石井酒店にポロシャツを着て現れる。文太、柴田洋服店の紙袋を手に持っている。
石井、配達の準備をしている。

石井「おう文さん」

文太「忙しそうだな」

石井「弘治が大学の試験らしくてな。……珍しい格好してるな」

文太「手伝おう」

石井「え？」

文太「配達。手伝わしてくれ」

石井、文太の言動を不審がる。

石井「……どうした？」

文太「どうしたってわけじゃないんだが、別に良いだろ？」

石井「文さん。この店は俺の親父の親父から続いて3代目。配達は代々石井家の長男がやってきた。なぜだかわかるか。配達が一番大事だからだ。わざわざウチを指名してくれるお得意先に自分の手で酒を運ぶ。こ
うやって信頼関係を築いてきたんだよ」

石井、話し続ける。

石井「昭和28年。ウチの祖父、石井重治が

この店を始めた時ってのは」

○ラーメン屋・店内

弘治、ラーメン屋のカウンター席に座っている。コップに入ったビールを1人で飲んでいる。

弘治「ぷはー！」

文太、浩二の隣に座る。

文太「よう」

弘治「ああ、どうも」

文太「大学はどうした」

弘治「え？」

文太「今日、試験なんだろ？」

弘治「あ、もしかして親父に聞いた？ あれ

ね、店の配達サボるための嘘」

文太「嘘？」

弘治「だってありえないでしょ。バイト代が出るわけでもねえのにこき使われてさ」

石井「なるほどな」

石井、店にやってきている。

石井「文さんが妙なこと言うから後をつけてみたら、そういうことだったのか」

石井、弘治につかみかかる。

石井「てめえ、自分の代わりに文さんに配達行かせようとしやがったなあ！」

弘治「はあ？」

石井「こんな真っ昼間からビール飲みやがって！ てめえはウチの店継ぐんだぞ」

弘治「……勝手に決めてんじやねえよ！」

弘治、石井の手を振り払う。

弘治「俺はな、誰かが敷いたレールの上を走るなんてゴメンなんだよ！ 自分の人生は自分の力で切り開くんだ！」

石井「なに薄っぺらいこと言ってるんだてめえ！」

石井、弘治に殴りかかろうとする。文太、慌てて止める。

文太「おいおい落ち着けって」

石井「離してくれ！ こいつはな、体で分かってやらねえとダメなんだ。おいてめえ、

ハタチ越えたからって調子こいてんじやねえぞ？　いくら体がデカくてもな、お前ごとき、簡単に――」

○公園

石井、弘治との喧嘩で負けた後。公園のベンチに座って頬を抑えている。

石井「あの野郎」

文太「大丈夫かよ」

石井、時計を見る。

石井「配達行かねえと。悪いな、文さんまで巻き込んで」

文太「あ、それなんだが」

石井「中やんと飲み来るんだろ？　またその時に」

石井、公園のそばに停めてあつた配達トラックに乗って去っていく。

○商店街

文太、商店街を歩いている。

小学生「えー、今日休みかよー」

文太、声の方を見ると数人の小学生がすずむら駄菓子前にいる。すずむら駄菓子のシャッターが閉まっており、「臨時休業」と張り紙が貼られている。

文太「ん？　んん！？」

文太、自分が手に持っている柴田洋服店の紙袋を見る。

文太、振り向き、柴田洋服店がなぜか通常通り営業していることを認識する。

文太「なんで今回だけ……？」

文太、すずむら駄菓子の裏口に回る。

文太「鈴村――？」

文太、裏口の扉が開く。

○すずむら駄菓子・店内

文太、裏口から店内へ。中から呻き声のようなものが聞こえる。

文太、鈴村宅の中に入っていく。

文太、鈴村と絹枝がロープで縛られて

いるのを見つける。
文太「！」

× × ×
1時間後、警察がやってきて鈴村夫妻から事情を聞いている。
警察「最近増えているんですよ。どうも、お客さんがいない店を狙っているらしくて」

○居酒屋六犬伝・店内(夜)

六犬伝の席には中津川、石井、鈴村がいる。石井と鈴村のテンションが低い。
中津川「どうしたの？」
石井「色々あったんだ」
鈴村「色々あったんだ」

○商店街(夜)

すずむら駄菓子、シャツターが降りている。文太、すずむら駄菓子の前に立ち、今回のループの理由を考えている。

○佐藤家・和室(朝)

文太、布団で目を覚ます。

○家電量販店・店内

文太、一人でスマホと小型カメラを購入して店を出ていく。
店員「お買い上げありがとうございます」

○柴田洋服店・店内

文太、柴田洋服店でポロシャツを選んでいる。他に客はいない。店内の棚には文太が置いた小型カメラが入り口付近を映している。文太、その映像をスマホでチェックしている。
狼と牛の被り物をした二人組が店の中を窺っている。実はミラクルの従業員、北山と東野であるがこの時点では明かされない。

二人、話し合っ店から離れていく。
文太、売り物のポロシャツを手に取り、

レジへ持っていく。
文太「お願いします」
柴田「ふあい」

○商店街

狼と牛の被り物の二人組、柴田商店街からすずむら駄菓子へ標的を変える。店の外から中を覗くと数人の客がいるように見える。

狼と牛、互いに顔を見合わせる。

文太、柴田洋服店から出てくる。

狼と牛、すずむら駄菓子の前から立ち去っていく。

文太、それを確認するとすずむら駄菓子に入る。

○すずむら駄菓子・店内

鈴村「文さん、これなんだよ」

店内には、服と帽子を着せられたマネキンが置かれている。マネキンは、店の外からは本物の人間のように見える。

文太「すまん、もう大丈夫だ」

文太、マネキンを柴田洋服店に戻す。

柴田徹は眠っていて気づかない。

○ラーメン屋・店内

弘治、ラーメン屋のカウンター席に座っている。コップに注がれたビールを、口に持つて行こうとする。

文太、弘治の腕を掴み、ビールを飲むと止める。

弘治「文太さん？」

文太「烏龍茶二つ」

文太、席に座る。

文太「配達は良いのか？ 親父に頼まれてんだろ？」

弘治「いや、まあ、別に良いんすよ」

店長「烏龍茶です」

店長、文太と弘治に烏龍茶を出す。

文太「これは俺の個人的な意見なんだが、決

められたレールを走るだけってのはつまらねえもんだよな」

弘治「……ですよね？ そうなんですよ！」

文太「たがな弘治。石井酒店の配達は代々、石井家の長男がやってきた。なぜだかわかるか。そもそも昭和28年。お前の曾祖父、石井重治が」

× × ×

20分後。弘治、文太の話を聞いて感動している。

弘治「そんな歴史があつたなんて！」

弘治、烏龍茶を飲み干す。

弘治「文太さん。俺、親父に謝ってくる！ 謝って手伝ってくる」

弘治、席を立つ。

文太「弘治」

文太、弘治の顔をスマホで撮影。

文太「お前、良い顔しているよ」

弘治「はいっ！」

○ミラクル・待機室

高子、スマホでマッチングアプリを開いている。ちょうどマッチしたところ。マッチした相手は「しゅん」という名前前で、先ほど文太が撮影した弘治の写真が使われている。

高子「キタ」

○カフェ・店内

文太、マッチングアプリを開き、「しゅん」のアカウントで高子とやりとりをしている。テーブルには「マッチングアプリの始め方」という本が置かれている。

○ミラクル・ビル前

弘治が配達用トラックに乗ってミラクルにやってくる。文太、ミラクルの前で待っている。ポロシヤツを着ている。文太「弘治」

弘治「あ、文太さん。さっきはありがたうございまして！ 文太さんのおかげで俺、目が覚めた気がします。これからは石井酒店4代目としての自覚を持って——」

文太「変わってくれ」

弘治「え？」

文太「この配達。俺にやらせてくれ」

弘治「待ってくださいいよ、文太さん。あなたが教えてくれたんじゃないですか。酒の配達は石井家長男の大事な——」

文太「財布から1万円を出す。」

○ミラクル・正面口前

文太「酒を持ってエレベーター5階から出てくる。」

文太「ミラクルの中に入る。」

○ミラクル・ラウンジ

ラウンジには兵藤と高子がいる。兵藤、北山と東野の帰りを待っている。

兵藤「おっせえな」

文太「石井酒店です」

兵藤「ああ、冷蔵庫のどこ置いといてください」

文太「かしこまりました」

兵藤「あの」

文太「……はい」

兵藤「いつもの人じゃないんですね」

文太「腰、やっちゃったみたいで」

兵藤「ああ」

兵藤「裏口へと向かう。」

高子「うそうそうそ」

高子のスマホ画面。「しゅん」から「僕も最寄駅同じです。良かったら今から会いませんか」とメッセージが来ている。

高子「やばい、どうしよう！」

高子「正面口から出ていく。」

文太「高子を見送り、スマホをポケットにしまう。」

○ミラクル・非常階段

非常階段には兵藤がいる。

兵藤、暴力団と電話している。

兵藤「もちろん。今日中に金は用意します。

ええ、500万」

兵藤、電話を切ってミラクルの待機室へ向かう。

○ミラクル・待機室

待機室には愛美がいる。

兵藤「あいつらは？」

愛美「まだ帰ってきてない」

兵藤「なにやってんだよ」

兵藤、待機室から出ていく。

○ミラクル・ラウンジ

兵藤、ラウンジに戻る。VIP ルームの扉が開いているのに気づく。

兵藤、VIP ルームを開ける。中に文太がいる。

兵藤「なにをしている」

文太「…：冷蔵庫って」

兵藤「こつちだ」

○ミラクル・正面入り口前

文太、配達を終えた後。

文太「またよろしくお願いしまーす」

文太、立ち去っていく。

○ミラクル・ラウンジ

兵藤が一人でいる。

愛美、待機室からラウンジにやってくる。

愛美「話があるんだけど」

兵藤、愛美、VIP ルームに入っていく。

部屋の隅に文太が仕掛けた小型カメラが置かれている。

○公園

文太と中津川、文太のスマホを見ている。

VIP ルームで話す兵藤と愛美の映像が流れている。

愛美が兵藤にスマホを見せている。

兵藤「誰だ、このおっさん」

愛美「中津川って言うんだけど、500万、

用意してくれるって」

兵藤「は？」

愛美「こいつ、私と結婚するつもりでいるの。

今から持ってくるって」

中津川「そんな……」

文太、スマホの映像再生を止める。

文太「中やん。この女はやめておけ」

中津川、力無く頷く。

文太「……よし、飲みいくか」

中津川「そう、だね。これはもう飲むしかないな。今日は奢るよー！ なんせ500万

あるからね！」

○居酒屋六犬伝・店内(夜)

文太、中津川、石井、鈴村がいる。中

津川の事情を一通り話した後。

石井「なんだそれ！」

鈴村「中やん、さすがに甘いつて。俺たちみ

たいなジジイと31歳のホステスが結婚つて」

中津川「もう言わないで」

石井「てかよ。なんで文さんは分かったんだ。

その、愛美って女が怪しいって」

中津川「いや、本当そこなんだよ！」

鈴村「そーいや文さん、昼間も変なことして

たよな？ ウチの店に柴田さんとこのマネ

キン置き始めて」

石井「あ、それでいやあ俺もあるぞ。弘治の

やつが急に配達手伝うとか言い出したんだ

けどな、それも文太さんに話を聞いたから

なんだと」

鈴村「文さん、これどういうことだよ」

文太「まあ良いじゃねえか！」

店員、新たに生4つを持ってくる。

店員「生4つお待たせしました」

文太「ほら、乾杯だ」

鈴木「よっしゃ！今日はもう中やんの失恋パーティーだ」

石井「まさか、この年で誰かの失恋を慰める

ことになるとは思わなかったな」

中津川「もうやめてって」

○歩道橋（夜）

文太、中津川、歩いている。中津川、

文太よりも後ろを歩いている。中津川、

文太「これで飲み納めか」

中津川「文さん」

文太「ん？」

中津川「ありがとな」

文太「なんだよ、改まって」

文太、振り向く。

中津川、歩道橋から飛び降りる。

文太「中やん！」

文太、歩道橋の下を見る。道路に落ち

た中津川がトラックに轢かれる。

車道が大騒ぎになる。

文太、それを見ている。

○佐藤家・和室（朝）

千代子、和室の戸を開ける。

千代子「お父さん。そろそろ……」

文太、布団の上に座っている。

千代子「どうしたんですか、怖い顔して」

○ミラクル・VIPルーム

VIPルームで愛美と兵藤が愛美のスマ

ホを見て話している。

兵藤「誰だ、このおっさん」

愛美「中津川って言うんだけど、500万、

用意して——」

ラウンジから高子の悲鳴が聞こえる。

○ミラクル・ラウンジ

兵藤がVIPルームから出てくる。
文太、金属バットを持って立っている。
北山と東野が倒れ、高子が腰を抜かして怯えている。

文太、兵藤に向けてバットを振り回す。
兵藤、それをかわして文太の腹を殴る。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の中で目を覚ます。

○ミラクル・ラウンジ

文太がミラクルを襲来した直後。

文太、兵藤に向けてバットを振り回す。

兵藤、それをかわして文太の腹を殴る。

兵藤「っ！」

兵藤、手を痛める。

兵藤「なんか入れてやがるな」

文太、兵藤の脇腹をバッドで殴る。

兵藤「ごほっ」

文太の背後で倒れていた北山が立ち上がっている。手には酒の瓶を持っている。文太の頭に振り下ろす。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の中で目を覚ます。

○ミラクル・ラウンジ

文太、兵藤に向けてバットを振り回す。

兵藤、それをかわして文太の腹を殴る。

兵藤「っ！」

兵藤、手を痛める。

兵藤「なんか入れてやがるな」

文太、兵藤の脇腹をバッドで殴る。

兵藤「ごほっ」

文太の背後で倒れていた北山が立ち上がっている。手には酒の瓶を持っている。文太の頭に振り下ろす。

文太、それを避けて北山の膝を金属バットで叩く。その場にうずくまる北山。その頭上から文太がバッドを振り下ろす。

す。

○ミラクル・正面入り口前

中津川、愛美に電話をかけているのが繋がらない。

中津川、店の中に入る。

中津川「すいませーん」

○ミラクル・ラウンジ

中津川、ラウンジまでやってくる。兵藤、愛美、東野、北山が血を流して倒れている。高子が隅で震えている。

文太、その中心にひとり立っている。

中津川「文さん？」

文太「……おう、中やん」

中津川「愛美ちゃん！ 愛美ちゃん！？」

中津川、愛美に駆け寄る。

文太「仕方ないんだ……。中やんは自分が騙されていることを知ったら、自殺する。だから、こうするしかなかったんだ。ああ。これ中やんに言っちゃダメか。まあ良いや。次は中やんが入ってこられないよう鍵も閉めて」

中津川「文さん！ ……なに言ってるんだよ？」

文太「お前のためだ。俺だってこんなことしたくない」

中津川「じゃあ……」

文太「ん？」

中津川「じゃあ、なんで今、笑ってるの？」

文太、ラウンジの鏡に映る自分を見て。そこには22歳の頃の自分が映っていて、血まみれの顔で笑っている。

文太「……」

文太、自分が笑っていることに衝撃を受け、そのままふらふらとミラクルから出ていく。

中津川「文さん？ 文さん！？」

○佐藤家・リビング（夕方）

千代子、買い物から帰ってくる。

文太、リビングの椅子に虚な表情で座っている。

千代子「……どうしたんですか？」

文太「俺は、昔からなに一つ変わってなかった。同じことを繰り返しているだけだった」

千代子「……夕食にしましょう」

× × ×

30分後、食卓に夕食が並ぶ。

千代子「いただきます」

千代子、夕食を食べ始める。

文太、夕食を食べる。

文太「……久しぶりに食べた気がする」

千代子「大袈裟ですねえ」

○佐藤家・廊下（夜）

風呂上がりの文太、パジャマに着替えて廊下を歩いている。文太、居間に声をかける。居間と廊下を隔てる扉は閉まっている。

文太「……」

文太、居間の扉を開ける。

文太「おやす……」

文太、千代子が倒れているのを見つける。

文太「千代子、千代子！？」

○病院・診察室（夜）

文太、医者の説明を聞いている。千代子の脳のレントゲンが貼られている。

医者「脳挫傷です」

文太「脳、挫傷」

医者「頭を強く打ったことが原因だと思われます。奥様、どこかで転ばれたりとかは？」

文太「えっと」

医者「今日1日、ご一緒には？」

文太「……いませんでした。今日は、一度も妻のそばに」

○病院・病室（夜）

千代子、病室のベッドで眠っている。

文太、その隣にいる。
文太、時計を見る。時刻が24時になる。

○佐藤家・和室（朝）

文太、布団の上で目を覚ます。

○佐藤家・リビング（朝）

文太、リビングに行く。千代子が朝食の準備をしている。千代子、文太に気づくとテレビを消す。

文太「母さん。今日は俺が家事をやる」

千代子「え？」

文太「母さんはゆっくりしていてくれ」

千代子「でも」

鮭を焼いているオーブンが焼き上がりの音を鳴らす。

千代子、鮭を取り出そうとする。

文太「俺がやる」

文太、オーブンの皿を直接持つてしま

文太「あつっ！」

○すずむら駄菓子・店内

鈴村、文太と電話している。

鈴村「待ってくれよ。どういふことだよ、文太さん」

○佐藤家・リビング

文太、朝食の皿洗いをしながら佐藤家の子機を使って鈴村と電話している。

文太「頼む。俺は今日1日、手が離せないんだ。あつ」

文太、皿を落とす。

○すずむら駄菓子

皿が割れる音。

鈴村「文さん、大丈夫かー？」

文太「頼んだぞ。そのまま言えば良いから」

○佐藤家・居間

千代子、ソワソワしながらテレビを見ている。

文太、居間の扉を開ける。

文太「じゃあ買い物に行ってくる」

千代子「本当に良いんですか？」

文太「……ひとつだけ頼みたいんだが」

○石井酒店・店先

弘治、家から出るところ。石井がそれを見つける。

石井「おい弘治。お前どこいくんだよ」

弘治「大学のテスト」

石井「なんだよ」

○ラーメン屋・店前

ラーメン屋に向かう弘治。店の前に鈴村が立っている。

弘治「どうしたんすか？」

鈴村「浩二」

弘治「はい」

鈴村「……」

鈴村、チラリと手に持っているメモを見る。

鈴村「えー、そもそも昭和28年。お前の曾祖父、石井重治がこの店を始めた時つてのはな」

○家電量販店・店内

文太、スマホを購入した直後。店員が見送っている。

店員「お買い上げありがとうございます」

店員、アンケートを見る。『スマホを持つのは何台目ですか？』の項目の『その他』の欄に『98』と書かれている。家電量販店から出た文太。鈴村に電話をかける。

○ラーメン屋・店前

鈴村、文太からの電話を取る。

鈴村「おお、文さん。誰の番号かと思ったよ」
文太「弘治は？」

鈴村「ああ」

鈴村、浩二を見る。弘治、鈴村の話を聞いて感動している。

鈴村「なんかすげえ感動している」

文太「代わってくれ」

○柴田洋服店・店内

柴田の店の黒電話が鳴っている。柴田、電話に出る。

柴田「はあい？」

○佐藤家・居間

千代子、電話をかける。

千代子「お世話になっております。佐藤です」

○柴田洋服店・店内

柴田、耳が遠くてよく聞こえていない。

柴田「なんだって？」

そんな店内の様子を狼と牛の被り物をした二人組が眺めている。

牛「どうする？」

狼、「すずむら駄菓子に行くぞ」と牛に指示する。

○佐藤家・玄関

文太、家に帰ってきて居間の扉を開ける。

文太「ありがとう、もう大丈夫だ」

千代子「柴田さん。じゃあ失礼しまねー」

千代子、電話を切る。

千代子「お父さん、これはどういう」

文太のスマホに電話がかかってくる。

文太「すまん、あとで。もしもし？」

千代子「スマホ？」

○すずむら駄菓子・店内

絹枝が文太に電話している。

絹枝「文さん、一体どういうことよ？」

弘治と鈴村、狼と牛の二人組を捕まえている。
二人の被り物は取られ、ミラクルに務める北山と東野だということがわかる。
鈴村、北山の財布からミラクルの名刺を見つける。

鈴村「おい、ミラクルの名刺出てきたぞ」

○佐藤家・リビング
文太「やっぱり」

× × ×
(フラッシュバック)

すずむら駄菓子に置いてあるマネキンを見て、すずむら駄菓子を襲うことを止めた狼と牛の二人組が、店の前から立ち去っていく。

文太、その後ろ姿を見ている。狼の被り物の下から、緑髪が見えている。

× × ×

○すずむら駄菓子・倉庫

すずむら駄菓子の倉庫で、北山と東野がロープで縛られて座らされている。

北山と東野、反抗的な目をしている。
鈴村、浩二もいる。

弘治「で、どうするんです？」

鈴村「お、文さんから指示が来てる」

○佐藤家・台所

文太、鍋でそうめんを茹でようとしている。

文太「皿、皿。あ、その前に菜箸か」

文太、めんつゆの入ったボトルを倒して中をこぼす。

文太「うわ」

千代子、そんな様子をこっそりのぞいている。

○すずむら駄菓子・倉庫

鈴村と弘治、文太から送られてきた指示のメッセージを読んでいる。『強盗たちのスマホを使い、奴らの上司に以下の文を送ってくれ』と書かれている。弘治「段取り良いですねえ」

○佐藤家・台所
千代子「段取り悪いわあ……」

○佐藤家・廊下
文太、廊下に掃除機をかけている。洗濯の終了を告げる電子音が鳴る。

○佐藤家・リビング
千代子がそうめんを食べている。派手な音が廊下から聞こえる。覗くと文太が掃除機のコードに足を引っ掛けて転んでいる。
文太「大丈夫だ」

○すずむら駄菓子・倉庫
北山、東野、ロープを外そうとしている。北山、棚の上にカッターがあるのを見つける。

○佐藤家・廊下
文太、洗面所に向かうと洗剤の泡が洗濯機から溢れている。
文太「うお！」
千代子「お父さん」
文太「大丈夫だ」
千代子「お電話が」

○佐藤家・居間
文太、テーブルに置いてあるスマホを手取る。知らない番号から。
文太「……もしもし」

○ミラクル・非常階段
兵藤、スマホで文太に電話をかけてい

兵藤「兵藤だ」

○佐藤家・居間
文太「メッセーじは受け取ってもらえたようだな」

○ミラクル・非常階段
兵藤「何が狙いだ」
文太「お前の部下は捕まえた。商店街の襲撃は失敗だ。このまま警察に突き出せばどうなるか分かるだろ？」

兵藤「……」
文太「二度とこんなことしないと約束するなら、部下は解放する」
兵藤、ミラクルのラウンジに目をやる。

○佐藤家・居間
文太「俺たちは年寄りだ。事を大きくするつもりはない」
兵藤「……断る」
文太「え？」

○すずむら駄菓子・倉庫
北山と東野はいない。ほどかれたロープが床に落ちている。

○ミラクル・非常階段
兵藤の視線の先にラウンジの様子がチラリと見えている。
高子が狼と牛の被り物を付けた男二人に話しかけている。
兵藤「悪いが、あんたの言いなりにはならない」

○佐藤家・居間
文太「待て。お前は若い、今からでもやり直せる！」

○ミラクル・非常階段

兵藤「年寄りってのは愚かだな。情をかければ若者が絆されると思ってる」
兵藤、電話を切る。

○ミラクル・ラウンジ
非常階段から兵藤、戻ってくる。

兵藤「あの二人は？」

高子「豚井買いに行かせた」

兵藤「戻ってきたら教えろ」

愛美「待機室からやってくる。」

愛美「ねえ、話があるんだけど」

○佐藤家・居間

文太、切れた電話を見ている。

文太「……」

文太のスマホに石井から電話。

○ミラクル・雑居ビル前

石井、文太と電話している。手には狼の被り物。

石井「もしもし文さん？　なんとか仕掛けてきたよ」

石井の隣には牛の被り物を脱いだ鈴村。

鈴村「暑っつい」

石井「でもよ、本当にこれが中やんのためになるのか？」

○佐藤家・居間

文太「おそろくな」

○ミラクル・雑居ビル前

鈴村「おいおい、嘘だろ」

鈴村、スマホを見ている。

鈴村、石井からスマホを借りて文太に

電話越しで報告。

鈴村「大変だよ、文さん。ウチの母ちゃん、あの強盗たち解放したって」

○鈴村駄菓子・和室

北山と東野、戸惑った様子で畳の上に

座っている。

ちやぶ台を挟んで向かいに絹枝。ちやぶ台の上に駄菓子が並んでいる。絹枝「好きなの食べな」

○佐藤家・居間

文太「まあ、良いんじゃないか？ 年寄りなんだから、若者に情くらいかけても」

○鈴木駄菓子・和室

北山、ちやぶ台の下に隠し持っていたカッターをちやぶ台の上に置き、深々と頭を下げる。

北山「すいませんでした」

○ミラクル・ビル前

中津川、ミラクルにやってくる。石井、ビルの前で中津川を待ち構えている。

石井「中やん」

○佐藤家・リビング

文太、カレーを作っている

○公園

中津川、公園のベンチに座り、石井のスマホでVIPルームでの映像を見ている。

鈴木、公園にやってくる。石井、中津川から離れて鈴木と会話。

石井「どうなった」

鈴木「母ちゃんが警察に連れてった。まあ、未遂だしそこまでのことにはならんだろ。」

…中やんは？」

石井「ああ」

石井と鈴木、中津川を見る。

中津川「いやー、まいったなあ！ でも、まあそっかあ、そうだよなあ！ こんな爺さんと結婚したい奴なんていないか！」

鈴木「中やん」

中津川「よし飲みいこう！ 今日は奢るよ

「！なんせ500万あるから」
石井「そう、だな。パーと飲むか」
鈴村「そうしよう！今日はとことん飲んで忘れよう」

○佐藤家・リビング（夜）

文太、石井からメッセージが届く。「今から中やんと飲んでくる」と書かれている。

千代子、カレーを一口食べる。

千代子「え、美味しい」

文太「本当か？」

千代子「はい。え、なんで？」

文太「クックパッドの力だ」

千代子「使いこなしてますね……」

○居酒屋六犬伝・店内（夜）

鈴村、石井、中津川が飲んでいる。

中津川「てかよお、なんで分かったんだよ、愛美ちゃんのこと」

石井「いや謎なんだよ。文さんに急に言われてな」

鈴村「それだけじゃねえんだよ。今日の昼、うちに強盗が入ったんだけどな、それも文さんのおかげでなんとかなったんだ」

中津川「えー？」

店員、新たに生3つを持ってくる。

店員「生3つお待たせしました」

鈴村「とにかく、今日はもう中やんの失恋パーティーだ」

石井「まさか、この年で誰かの失恋を慰めることになるとは思わなかったな」

中津川「もうやめてっ」

○佐藤家・浴室

千代子、浴室から出てくる。文太、待ち構えている。

文太「転んだりはしなかったか」

千代子「はい」

文太「じゃあ布団敷いといたから。今日はも

う寝ろ」
千代子「わかり、ました」

○居酒屋六犬伝・店の外(夜)

店の外。鈴村、石井、ほどほどに酔っている。中津川、けっこう酔っている。

鈴村「よし、2軒目行くぞ！」

中津川「ええ、まだ飲むのー？」

鈴村「言っただろ。今日はとことん飲むって。

中やん、付き合えよ」

中津川「わかったわかった。……あれ？ あ、

財布置いてきたわ。ちよっと待ってて」

中津川、店の中に入っていく。

鈴村「……大丈夫かな」

石井「どうだろうな」

石井、スマホを見ている。文太からメッセージが届いている。「中やんから目を離すな」と書かれている。

○佐藤家・居間(夜)

文太、石井に「中やんから目を離すな」とメッセージを送った後。スマホを置き、洗濯物をたたみ始める。

○居酒屋六犬伝・店の外(夜)

石井と鈴村、中津川を待っている。

石井「遅くねえか」

○居酒屋六犬伝・トイレ前(夜)

鈴村、トイレをノック。

鈴村「中やん」

トイレの扉が開く。別の人間が出てくる。

鈴村「え」

石井「おい」

石井の視線の先には従業員用の出口。扉が開いている。

○商店街(夜)

石井と鈴村、中津川を探している。

石井「なかやーん！」
鈴村「なかやーん！」

○歩道橋（夜）

中津川「……」

中津川、歩道橋の下を虚な目で見てい
る。手すりに足をかけ、まさに今、飛
び降りようとする。そんな中津川の膝
を文太が抱き抱える。

中津川「！？」

文太「待たせたな、中やん」

中津川「文さん？ やめてくれよ！ 死なせ
てくれよ！」

文太「そういうわけにはいかないだよ」

文太、中津川を歩道橋の内側まで引き
上げる。

中津川「なんで止めるんだよ。なんで……う
わあああん！」

○佐藤家・玄関（夜）

文太、中津川を連れて家まで戻って
くる。

石井と鈴村、佐藤家の前で待っている。

鈴村「おお、中やん！」

石井「なんだよお前、死のうとしたって！」

鈴村「さっきまであんなに楽しそうに飲んで
たじゃねえか」

中津川「だって、だってええええ！」

文太「とりあえず上げれ」

○佐藤家・居間（夜）

文太、石井、鈴村、中津川、居間にや
つてくる。千代子がすでにいる。

千代子「あら、皆さん」

鈴村「おーどうもどうも」

文太「起きてたのか」

千代子「すいません、眠れなくて」

中津川「ううう」

千代子「どうしたんですか、中津川さん」

石井「色々あったんです」

中津川「俺はダメだあ。昔っから何一つ変わってないんだ。いつとも上手くいかないだ」

文太「上手くいくことだけが人生じゃねえだろ」

中津川「他に何かあるって言うんだよ」

文太「……ほら、食べる」

文太、カレーを中津川の前に出す。

千代子「お父さんが作ってくれたんですよ」

石井「文さんが？」

鈴村「どういう風の吹き回しだよ」

千代子「今日ちよっと変なんです」

石井「それは確かにそうなんですよ」

鈴村「しかも一切の説明がない」

中津川、カレーを食べる。

千代子「どうですか？」

中津川「……そこそこだよ」

文太「そこそこ！？」

石井「そりやそうだよ」

鈴村「普段料理しない人間のカレーなんて、そりや、そこそこだよ」

文太「でもクックパッド見たんだぞ」

石井「それでそこそこはヤバイな」

鈴村「根本的なセンスがないんだろうな」

中津川「うわああああん」

○ミラクル・ラウンジ

愛美、中津川に電話しているが繋がらない。

愛美「もうなんでよ！」

兵藤「……諦めるか」

愛美「でも」

兵藤「仕方がない」

西条「兵藤さん」

西条、中津川が持っていた紙袋を持って入ってくる。

西条「これが、店の前に」

○佐藤家・居間（夜）

24時近く。石井、鈴村、酔いつぶれ

ている。

○佐藤家・玄関（夜）

金をミラクルまで届けた文太、戻って
くる。

中津川が出迎える。

中津川「ありがとな」

文太「本当に良かったのか？」

中津川「うん」

○佐藤家・台所（夜）

千代子、皿を洗っている。

文太「母さん、俺がやる」

千代子「ありがとうございます」

千代子、リビングの椅子に座る。

文太、皿を洗い始める。

文太「家事ってのは大変だな」

千代子「そうですよ？」

文太「つまらねえだろ。毎日が同じことの繰
り返しで」

千代子「そんなことないですよ。それに、今

日は特別な日です」

文太「……そうか」

千代子「あ。もう12時回っちゃった」

文太、時計を見る。0時を過ぎている。

（完）